

ICタグで薬剤管理へ、実用化にめど 京都医療センターと日本IBM

独立行政法人国立病院機構京都医療センター(京都市伏見区)と日本IBMは7日までに、ICタグを使って病院の薬剤を管理する国内初の実証実験で、実用化のめどをつけた。医薬品の出荷から患者への投薬までの流れを追跡できるシステムで、実用化されれば医療過誤の防止や汚染薬剤の回収などに利用できる。

実証実験は、総務省によるICタグ関連の開発プロジェクトの一環。2004年度から同センターとIBM、京都高度情報化推進協議会、非営利研究組織のAuto-IDラボ・ジャパン(神奈川県)がシステムを構築して共同実施してきた。

システムは薬剤の種類、ロット番号、有効期限などの情報が入ったICタグを薬剤瓶の底に添付。そのタグを読み取り機で識別し、医薬品の発注から患者に投薬するまでの流れを追跡(トレーサビリティ)する。電子カルテに連動させて患者に投薬した薬の情報もカルテで一元管理できる。

3月上旬に2週間かけて、60個の薬剤を使って同センターで実験した結果、病棟で薬の照合と投薬処理の時間を従来の半分程度に短縮。患者の投薬情報の検索も可能になった。システムに問題はなく、院外の製薬会社と他病院との連携が可能なことも証明できたという。

今後2年間、本格的な実用化に向けてシステムの実験を進める予定。同医療センターの北岡有喜医療情報部長は「読み取り専用の二次元バーコードに比べ、ICタグは書き込みもでき、高度な情報管理が可能になる」としている。



薬剤に付いているICタグを読み取り機で識別する職員
(京都市伏見区・独立行政法人国立病院機構京都医療センター)